特定のエピソードの忘却に関する認識と記憶特性の関係

堤 聖月

(神戸学院大学大学院 人間文化科学研究科)

キーワード: 忘却に関する認識, 自伝的記憶, 記憶特性

Relationship between conception about forgetting and memory characteristics of specific episodes

Mizuki TSUTSUMI

(Graduate School of Humanities and Sciences, Kobe Gakuin University)

Key Words: conception about forgetting, autobiographical memory, memory characteristics

目的

人間は自らの記憶に関する認識や信念に基づき、記憶活動を統制している。同様に、忘却に関する認識や信念もまた、記憶活動および忘却活動の統制に影響を与えるだろう。特に、自分が過去に経験した出来事の記憶を忘れることに対する不安や抵抗感などの認識は、その記憶の重要度や想起時の鮮明さなどに影響を与えると考えられる。

しかし、忘却に関する認識や信念についての研究は少ない(Naka & Maki, 2006)。また、記憶と忘却は関係が深い、単純に対となる概念ではないため、記憶に関する信念についての既存の尺度では、人間の記憶活動および忘却活動の全体像を十分に捉えることはできない。したがって、忘却に関する認識を検討することの重要性はきわめて高いといえる。

そこで本研究では、忘却に関する認識と記憶特性の間にはどのような関係がみられるのかを検討する。

方法

調査対象者

18–25歳の大学生 284名(男性 124名, 女性 160名, 平均年齢 19.68歳, SD=1.30)。

質問紙の構成

①「これまでの人生で最も印象深く、記憶に残っている出来事」についての、時間、場所、内容の自由記述、②特定のエピソードを忘却することをどのように感じるのかについての項目(25項目, 7件法)、③記憶特性質問紙(Memory Characteristics Questionnaire, MCQ, 11項目, 7件法)

表1 忘却に関する認識についての項目の因子分析結果

因子名	I	II	III	b^2
「忘却への懸念」(10項目, $\alpha=.93$)				
12.もしこの出来事を忘れたら可哀しい。	.98	-.12	.11	.77
04.この出来事を忘れるのは良いことだ。	-.94	.37	-.01	.59
23.この出来事を忘れたくないと強く思うだろう。	.89	-.01	.07	.73
17.この出来事について、忘れてもかまわない。	-.85	.05	.06	.72
10.この出来事を忘れるのはよくない。	.80	.09	-.07	.78
09.この出来事を忘れたら私は後悔するだろう。	.75	.17	-.02	.76
05.もしこの出来事を忘れたら、思い出そうと必死になるだろう。	.66	.21	.15	.58
25.この出来事を忘れてしまっても自分は気にしないだろう。	-.58	-.23	.06	.58
02.この出来事が起きた後すぐに忘れないうちにしようと思った。	.49	.17	.15	.31
21.この出来事をいつか忘れてしまっても仕方がない。	-.46	-.05	.36	.52
「忘却が自己に与える影響」(6項目, $\alpha=.80$)				
18.この出来事を忘れたら、物事に対する感じ方や考え方が変わるだろう。	-.30	.94	-.01	.64
08.この出来事を忘れたら、私は自分がどんな人間かわからなくなるだろう。	-.08	.90	.01	.73
13.この出来事を忘れたら自分は変わってしまうだろう。	.07	.83	.05	.75
07.この出来事を忘れたら今の自分とのつながりが感じられなくなるだろう。	.07	.82	.09	.69
01.この出来事を忘れることは私に影響を及ぼすだろう。	.28	.54	-.03	.56
14.この出来事を忘れていくことに気付いたら驚くだろう。	.24	.43	-.14	.45
「忘却に対する時間的展望」(3項目, $\alpha=.72$)				
06.私はこの出来事をいつか忘れてしまっだろう。	-.02	-.02	.90	.84
15.この出来事を忘れるのではないかと不安になる。	.26	.19	.51	.24
22.この出来事はなかなか忘れることはできない。	.12	-.17	-.47	.39
因子間相関	I	II	III	
I	—	.61	-.42	
II		—	-.36	
III			—	

結果と考察

因子分析の結果

忘却に関する認識の項目およびMCQの因子構造を検討するために、因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。解釈可能性の点から、忘却に関する認識についての項目では①忘却への懸念(10項目, $\alpha=.93$)、②忘却が自己に与える影響(6項目, $\alpha=.80$)、③忘却に対する時間的展望(3項目, $\alpha=.72$)の3因子が抽出された(表1)。

MCQでは、①鮮明さ(16項目, $\alpha=.88$)、②意味づけ(12項目, $\alpha=.76$)、③全体的印象(4項目, $\alpha=.69$)、④時間情報(5項目, $\alpha=.75$)の4因子が抽出された。

忘却に関する認識とMCQ

忘却に関する認識が記憶特性にどのような影響を与えているのかを検討するために重回帰分析を行った(表2)。

「忘却への懸念」は、MCQのすべての因子に影響を与えていた。特に「忘却への懸念」は「全体的印象」に対して強く影響を与えていた。その出来事を忘れてしまうことについて、回避しようとしたり否定的に捉えているほど、出来事の影響が良くなるのが明らかになった。

また、「忘却が自己に与える影響」は、「意味づけ」に正の影響を与え、「全体的印象」に対して負の影響を与えていた。これは、その出来事の忘却が自身の考え方や過去とのつながりに変化を与えると認識することによって、出来事に対する解釈が深まり、出来事への意味づけが強まったと考えられる。

さらに、「忘却に対する時間的展望」は、「鮮明さ」と「意味づけ」に対して負の影響を与えていた。出来事に対して、いつか忘れるだろうという展望をもっているほど、出来事の鮮明さや出来事と自己との関連づけが低くなるのが明らかになった。これは、その出来事を忘れることは可能であり、時間が経てば忘れるだろうという予期を強くもっているほど、出来事の内容を維持しようという統制感が下がり、鮮明さが低下したと考えられる。

引用文献

Naka, M., & Maki, Y. (2006). Belief and experience of memory recovery. *Applied Cognitive Psychology*, 20, 649-659.

表2 自伝的記憶の記憶特性を目的変数とした重回帰分析結果

説明変数	MCQ			
	鮮明さ	意味づけ	全体的印象	時間情報
標準偏回帰係数(β)				
忘却への懸念	.29 ***	.24 ***	.57 ***	.34 ***
忘却が自己に与える影響	.03	.30 ***	-.31 ***	.05
忘却に対する時間的展望	-.28 ***	-.15 ***	-.29	-.04
R^2	.23 ***	.30 ***	.21 ***	.16 ***

*** $p<.001$